

森屋めぐみ

（平成三十一年二月号）

直しても進んでしまう腕時計五分遠くにいるのだ我は
職場には職場の顔の我がいて日暮の早い薄墨の窓
出番前の廊下に響く太棹は時々なおんと猫のごと鳴く
お揃いのハロウインの仮装をした姉妹夕日に四つ猫の耳立つ
ボデイコンはいつから死語かむんむんとマゼンタ色のワンピース行く
乳液を塗るたび真似る東京都美術館のあの暗がりの「叫び」
気付かずに蚊柱の中に突っ込んでわやわやの顔土鳩が笑う
少しずつ三階建てになってゆく建築現場に朝虹かかる

●作者の言葉

正直に言うと、歌集を出した時に「これでもういつ短歌をやめてもいい」と思った。実際、親しい人にはそう言っ

ていたと思う。あれから五年。斎藤佐知子さんの年間選者賞を頂くことになった。作者の形は千差万別だ。机の前で呻吟して作るタイプではな

く、言葉が降りてくるのを待つ私には、このやめることと隣り合わせの危うさが、性に合っているらしい。今回、こうしてまた私を短歌に繋ぎとめて下さった斎藤さん、ありがとうございます。いつでもやめられるけれど、なかなかやめられそうにない。

●選者の言葉

森屋めぐみさんの作品は、どこかに必ず猫の気配がある。太棹三味線が、なおんと猫のごと鳴くとか、ハロウインの仮装の姉妹がお揃いで猫の耳を付けていたりとか。こうした現象である目に見える猫はもちろんだが、本当は森屋さんの感受性そのものが猫的なものを帯びているのではないかと秘かに深読みもするのである。

マゼンタ色のボデイコンスーツのしなやかで蠱惑的なイメージはもとより、鏡に映る自分の顔と対話しているシーンなど、ひっそりとひとりでいることが好きな人なのだと思います。なにやらミスティアスな雰囲気か漂う。

他者を拒否するのではなく、自然体の、群れない心の姿勢が印象的である。

